

第一にもせよ第二にもせよ、俳句は、藝術のひとつだと認められた形だが、その藝術とは、いったい何か。これは、実は、わたくしの領分ではないので、すこし小さい声で申しませんが、有限な人間が「永遠」につなかりを付けようとする努力のひとつ——と存するのであります。科学も、宗教も、同じことです。しかし、藝術は、とくに「表現」を中心とするところが、科学や宗教と違つてます。

さて、その「永遠」につらなつてゆく行きかたに、ふたつある。ひとつは「完成」をめざすもの、他のひとつは「無限」にあこがれるものである。完成をめざすものは、ちゃんと出来あがつて、それ以上どうにもならない在りかたで「永遠」につらなつてゆく。まあ、中宮寺の彌勒菩薩像でもごらんさない。あの美しさは、あれ以上どうにもなりません。どこか修正すれば、もとよりも拙くなるだけです。模造もできない。模造してみたところで、あれ以下のものしか出来ませんよ。こんな在りかたを、わたくしは「雅」と名づける。『源氏物語』や、新古今時代の名歌や、宗祇の連歌などは、みな雅の藝術である。もつとも、雅の藝術といつても、ことごとくりつばな傑作だとばかりは限らない。詰まらない雅だつていくらもある。それは、低いところで固まつてしまつて、それ以上どうにもならないやつである。次に、無限なるものにあこがれる行きかたは、どこまでも新しいものにたち向つてゆく。それは、停まるどころを知らない。「これまで無かつたもの」が、限りなく追求されてゆくのである。その結果、みがきあげる暇がない。だから、しばしば粗雑でもあり、不安定でもあり、ときには下品でもある。これを、わたくしは「俗」と名づける。しかし、俗なるもの

は、悪い面だけとは限らない。そのなかには、雅なるものに見られない生きいきとした躍動性、ひろびろとした感覚のゆたかさ、純粹な心の「まこと」などがあって、永遠に人の胸をうつ。これは、良い意味の俗である。要するに、雅も俗も、ひとつの「様式」であって、かならずしも「価値」には関係しない。

ところで、俳諧とは、その雅と俗とにまたがった表現である。学界では、俳諧を俗だけで割りきる意見が普通だけれど、わたくしは賛成できない。俳諧とは、片足を雅に、片足を俗にかけた表現なのである。どちらの足に重心をおくかは、人により時勢により同じでないとしても、両方の世界にまたがることは変らない。もし、どちらかの足をぬいてしまったら、俳諧でなくなる。江戸期の俳諧は、その根柢に、かならず連歌——もしくは和歌——の表現を意識した。それが雅である。そして、その雅からふみだした世界——つまり俗なるもの——との対照に、俳諧味を感じた。雅と対照された俗だから俳諧味があるので、雅との対照を意識しない俗は、もはや俳諧ではありえない。

しかるに、子規の革新によって、俳句は、いっぽんだちの文藝となった。それ以後、俳句は、連歌や和歌との距離をたえず意識しなくともよいことになった。つまり、俗いっぽんであり、雅からは足をぬいてしまったのである。だから、俳句は俳諧と同じでない。もつとも、事実としては、雅と俗にまたがったのもあり、雅いっぽんになったのも時として無いではない。しかし、大きな「俳句の流れ」は、あくまで俗の原野を流れてゆく。「これまで無

かったもの」こそ、現代俳句の目標でなくてはならず、その流れからはみだしたものは、俳句として傍流以外の何ものでもない。江戸期でも、談林派の俳諧などは、ひどく新しがりであつた。しかし、それは、連歌よりもひどく新しいのであつた。俳句における新しさは、どこまでも俳句自身のなかで新しいのである。そこに俳句の強みもあり危なさもある。